南山大学　人間関係研究センター　公開講演会（無料）

関係性の回復に向けて

2012年5月30日（水）　18時30分～20時30分

南山大学名古屋キャンパスＲ棟１階フラッテンホール

講師　玄侑（げんゆう）　宗久（そうきゅう）氏

1956年福島県生まれ。慶応義塾大学文学部中国文学科卒業。現在は臨済宗福聚寺第35世住職。福島県警通訳（英語・中国語）。福島県立医大経営審議委員。花園大学国際禅学科、新潟薬科大学応用生命科学科、客員教授。2001年、「中陰の花」で第125回芥川賞受賞。2007年には柳澤桂子氏との「般若心経　いのちの対話」で第68回文藝春秋読者賞を受賞。著書には『四羅川流景』（文藝春秋）、『テルちゃん』（新潮社）、『阿修羅』（講談社）などの小説のほか、『荘子と遊ぶ』（筑摩選書）『日本的』（海竜社）など幅広い論考や随想、また『自然と生きる』（東京書籍）など対談本も多い。近著は『福島で生きる』（双葉新書）『無常という力』（新潮社）など。
2011年4月から東日本大震災復興構想会議委員。
公式サイトは、http://genyu-sokyu.com

東日本大震災以後の復旧に向かう時間のなかで、私たちの「関係性」への認識には、ある種の目覚めがあったように思う。さかんに「絆」と言われるが、それかもしれない。人はさまざまな関係性のなかで生きており、たとえばそこには家族や親族、友人や地域の人々、あるいは動植物や時には無生物さえ、同じ生態系に存在するものとして関係しあっている。むろん海や山などの自然との関係も重要である。その関係性の大切さに、私たちは今回の震災をとおして気づいたのではないか。復興とは、関係性の回復なのだ、とも……。

日本人の場合、そこに死者との関係も強く関わってくることは、特筆していい。万葉集に登場する「夏樫（なつかし）」という表現や、「面影」「あはれ」などの美学にまで昇華された日本人独特の感性にも、それは表れている。
固有神として、噴火口を意味する神（大穴牟遅神）をもつ国にとっては、「無常」こそがあらゆる思考の原点だったのではないか。「無常」を基盤に据えた我々日本人の思考や文化について、考えてみたい。

～ 参加費は無料です。ご参加希望の場合は事前に下記までご連絡お願いします。～

主催：南山大学　人間関係研究センター　〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18
Tel：052-832-5002（10:00-16:30　土日祝日休み）　Fax：052-832-3202
E-mail: ninkan-c@nanzan-u.ac.jp　Web ページ: http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/NINKAN/

※参加者の「氏名」「電話番号」「E-mail アドレス」をお知らせください。※駐車場のご準備はございません。

【個人情報について】今回ご提供いただきます個人情報は、南山大学個人情報保護に関する規程に基づき、適正な利用と保護および必要な安全措置を講じて参ります。1．講演会に必要な事務連絡、2．今後の本学公開講座ご案内（パンフレット送付等）、3．当日受付簿作成以外の目的には使用いたしません。